小－13

腎盂尿管ファイバースコープを用い尿管側より腎結石を摘出した腎結石および尿管結石症の猫１例

○遠藤能史　丹羽昭博　廉澤　剛
酪農大伴侶動物医療学

【はじめに】猫の腎結石や尿管結石は食事療法や内科療法での溶解が困難なシュウ酸カルシウム結石が多く、外科的摘出が必要となることは少なくない。腎切開術は腎結石摘出の際適応となるが、本術式は血流遮断や組織損傷により腎機能低下が生じる。特に尿管閉塞を伴う腎結石の症例では術前からの腎機能低下が認められ、更なる低下が生じることが危惧される。近年、細径内視鏡を尿管側より挿入して腎結石を摘出する術式が、血流遮断や腎組織損傷による腎機能低下のリスクの低い術式とし報告されている。今回挿入部外径2.8 mmの腎盂尿管ファイバースコープを用い、尿管側より腎結石摘出可能であった症例に遭遇したためその概要を報告する。

【症例】アメリカンショートヘアー、２歳齢、去勢雄、体重3.5 kg。紹介病院にて高窒素血症が認められ、超音波検査にて左腎臓の水腎症、左尿管結石および尿管拡張が認められたため本院を受診した。本院における画像検査にて左側尿管結石、尿管拡張の拡張（尿管の最大径は9.0 mm）および３個の左側腎結石が認められた。左尿管の閉塞を解除するために初診翌日に腎および尿管結石の摘出術を実施した。手術用顕微鏡下にて拡張著しい近位尿管に縦切開を加え、腎盂尿管スコープを腎盂へと挿入し、鉗子チャンネル（内径3.6 Fr.）より生検鉗子（内径３Fr.）を挿入し、結石を把持したのちにスコープとともに結石を摘出した。３個の結石を摘出した後に尿管切開部を並置縫合した。次に尿管結石直上の尿管を縦切開し結石を摘出した。摘出後結石摘出部の尿管狭窄が認められたため新尿管膀胱吻合術を実施した。その後、腎瘻チューブを設置し閉腹した。

【考察】今回用いた腎盂尿管ファイバースコープはビデオスコープと比較して画像の鮮明さでは劣るものの、腎盂結石の確認および摘出は可能であり、挿入部外径が2.8 mmと小さいことから尿管径の細い猫の腎結石を尿管側より摘出する際に有用であると考えられた。結石把持に生検鉗子を用いたが先端の形状から把持力が弱く、腎盂壁と接着する結石も存在したことからより把持力のある鉗子を検討する必要性があると考えられた。また、本症例は尿管拡張が著しくスコープの挿入が容易であったが、更に細い尿管径の症例においても可能かどうか検討する必要性があると考えられた。